

三井のリフォーム 住生活研究所長 西田 恭子

音の風景を楽しむ

台風の季節になると、「我が家は大丈夫だろうか？」と心配になる方は多いだろう。

八月に首都圏を襲った台風九号は、土砂崩れで電車が傾いて不通になっただけではなく、屋根が飛んでしまい部屋から空が見えている家が何件も出るなど、考えられない被害にあわれた方々がいた。

その台風では、我が家から少し離れた地域は「緊急速報！」により「避難準備情報」が出され、すぐ近くの小学校などが避難場所として指定され、ラジオや携帯電話画面で避難準備を促された。

だが、年に数回台風が来るかどうかわからない地域の方が、台風対策を声高におっしゃることは意外と少ない。こんなに地震を心配される方が多いの不思議なぐらいだ。

考えてみると、毎年話題になる台風の被害は雨、風によるものだが、それを守る家づくりが出来ていたとしても、あのゴーゴーという暴風の音の怖さが、「我が家は絶対に大丈夫か」という不安に繋がる。

「音の風景」という言葉を使うことがある。見えない音がその時の情景を創造的に作り出すことを言うと思うのだが、ゴーゴーという台風の暴風音は必要以上に恐怖心をあおる。

その後台風が去ると、一斉に蝉がミンミンと泣き始め、再び夏の暑さと夏の終わりを告げ、安全に住まいと自分が守られたことの喜びが感じられる。

音とは不思議なもので、東京の広尾などは、昔はひぐらしのカナカナという鳴き声を楽しむ名勝だったとのことで、風流に自然をめでることができ、虫の声で句会が催され、名作も生まれていたようだ。

しかし、建築では音は封鎖する、あるいは遮断するべきものとして扱われる。生活騒音・家事騒音をなくするための防音性はとうなっているか、遮音性は大丈夫なのか等と音はとにかく嫌われる。

戸建では一階と二階との間にも遮音材が入られ、窓には防音効果の高い二重サッシやインナーサッシが設置される。どこまで音をシャットアウトできるかが

設計で問われるのだが、どうやら生活空間としてのインテリアに、音もしっかりと扱われるべきなのではないだろうか。

コチコチコチと振り子時計の音が聞こえるのもいいものだし、寝息や寝言、赤ちゃんの泣き声も生きているあかしとして捉えると、ほほえましい。音環境も文化の一環と考えると、騒音・雑音と思っていたものも違って聞こえるかもしれない。

小学校の近くに住んでいる私だが、運動会の練習が始まることで一年の中の季節を感じ、校庭解放での野球の練習やサッカーの練習音では、休みの曜日を意識する。

学校の近くはつるさいと思つ人もいるよつただし、保育園建設に反対される方もいる中で、体験的には外部からの息遣いとして楽しめている私がいる。

都市の見えない資源を探り、発信するという「サウンドスケープ・デザイン」を推進している方がいる。都市の中でも「音の風景」をもう一度再認識する必要がありそうだ。



西田恭子氏プロフィール＝一級建築士。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム 住生活研究所」所長。リフォーム設計の経験を活かし、新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常勤講師。インテリア学会会員。日本建築家協会会員。